1997年10月31日

ヴィーナス通信

Venous（静脈） Venus（護美の女神）

第6号

発　行　東多摩再資源化事業協同組合
理事長　紺野武郎　編集長　吉浦高志
東京都東村山市久米川町1-16-5
TEL & FAX　0423-95-9788

二十三区の行政回収の問題点

理事長　紺野武郎

東京二三区でモデル実験している資源の行政回収は、古紙やびん缶などを週一回ごみステーション単位で回収するシステムで、多摩地区ではすでに実施している自治体が多い。実施した各市の殆どは、十分かつ慎重な準備を重ねている。①ごみや資源の収集に民間委託を積極的に進めたこと。②回収資源の選分加工・流通に地元業者との話合いを重ね、その人員・設備・システムを十分に活用したこと。③市民に対しては、民間回収への協力と、分別の徹底を厳しくPRしたこと。④集団回収の拡充と維持に、市民団体はもちろん回収業者に対しても支援体制を整えたことなどである。多摩で実施した時期は、古紙市況の方もまだ好調な時であったが、それでもチリ紙交換回収などの民間回収部分は大打撃を受けたといわれ、その後、古紙が余剰化して古紙価格が破壊すると、その傾向がさらに進み、当組合関係六市行政回収の古紙取扱量も、前年より毎月四〇〇トンも増加し、緊急に赤字の海外輸出を実施して急場を乗り切った。資源回収の難点は、季節や曜日・天候・景気等によって発生量に大差が出ることと、受入れ先によって量と品質が限定され需給の時間差も大きい。回収業者は、長年に渡って毎日の仕事量と資源の品質および数量の管理に心血を注いできた。それが最低コストで高品質の再生資源を安定供給し、我が国基幹産業の原材料を支えて少資源対策にもなった。二三区の行政回収は、実施面でも規模的にも多摩とは大差があり、準備不足もめだちその影響が心配される。また都が直接回収した場合、古紙の回収コストがkg当たり四五円・びん缶で一三〇円位になるとのこと、これは民間回収の数倍になってしまう。都は、古紙の利用拡大状況を見極め、段階的にしかも民間の人員・車両・設備・流通網をすべて活用した実験拡大をしなければ、全国のリサイクルシステムと関係業界に大打撃をあたえることになり、現況のまま大量輸出などとなれば、民間の輸出事業はもちろん内外の古紙・紙製品両市況にまで混乱が起きかねない。多摩地区の経過と古紙余剰状況からの教訓は、徹底した発生抑制策と再資源化の受皿を確認もしないリサイクルは必ず行き詰まると言うことだ。川下で必死に処理をするだけでなく、受益者によるコスト負担で再資源化可能なものの回収と再利用を義務づけ、無駄な生産と消費を抑制するような「新東京ルール」を都は勇断をもって実現してほしい。

直言拝聴

ドイツのリサイクルと住民参加

松下政経塾　16期生　栗田　拓

神奈川県藤沢市の運営する市民電子会議室（インターネットを使った住民の意見交換・提案システム）で、ゴミの有料化が話題となっている。

議論のきっかけとなったのは、一〇月一日から開始された黒いゴミ袋の不回収、取り残し施策である。

藤沢市も他の自治体同様、最終処分場の確保に頭を悩ませている。

今度新しく供用が開始される女坂最終処分場の寿命は六～七年。これに続く最終処分場の用地確保の目途は全くついておらず、市はこの女坂最終処分場の寿命を何とか二倍近くまで延ばし、平成二〇年までは使用していきたい意向である。

その為、分別の徹底、半透明袋の導入、コンポスト容器の購入助成制度などを通じて、ゴミの減量に努めている。

ゴミ減量の一つの鍵が、製造者がゴミになる商品を生産しないことに、もう一つの鍵が、排出者による分別とそれにともなうリサイクル、再資源化にある事は、いまさらいうまでもないことだろう。

生産から廃棄まで、全ての段階において、産業界、市民、行政の協力体制を作る事が、ゴミの減量に繋がるのである。

しかし現実的には、この三者の協力体制どころか、市民の間の協力体制を求めるのも難しい。

分別を徹底させるには市民ひとりひとりの自覚と努力が必要だが、単にモラルの向上を訴えても、なかなか全員にゴミ分別の意義を行き届かせるのは難しい。

藤原市が、黒いゴミ袋の取り残し措置を決めたのも、市民意識の向上を狙っての窮余の策であったといえる。

九月前半にドイツのフライブルグ市へ行ってきた。

フライブルグ市は、特に住民の環境問題に関する意識が高い町で、住民ひとりひとりが、ゴミの分別収集にもひじょうに協力的である。

シュバルツヴァルト（黒い森）に囲まれた町は人口約二〇万人。町中を疎水が流れる美しい町である。

そのフライブルグ市では、ゴミがなるべく発生しないように工夫されている上に、徹底的な分別がされている。

たとえば、スーパーで野菜を買うときもすべて量り売りである。客は、自分たちで野菜の重量を量り、出てきたシールをはって、レジに持っていく。　歯磨き粉などのチューブものは、日本のようにさらに箱に入れることはしない。

循環経済法の下、リターナブル容器の使用もかなり普及しており、商店やスーパーマーケットには、容器の回収ボックスが必ず備えつけられて

いる。

さらに特筆すべきは、徹底したゴミの分別である。

茶色、緑色、透明の三色に分別されたビン（リターナブル不可のもの）・ガラス類、カン、紙ゴミ、金属類、埋め立てゴミ、生ゴミなど、現在8分別による収集が行われている。このうちビン類やアルミ・金属類など4種類は、町中の辻々にあるステーションで収集される。

市民は、各家庭から出たそれらのゴミを、通りにあるボックスまで投げ込みに行く。

埋め立てゴミ、生ゴミなど残りの4種類が家庭での個別収集方式になっている。

各家庭に備え付けの規格品の大きなバケツに入れ、収集日にバケツを押して（タイヤがついている）通りまで持っていく。

昨年までは、生ゴミは埋め立てられていた。

今年の4月からは、巨大なコンポスト工場が稼働し始めて、フライブルグを含む近隣3自治体の生ゴミすべてが、このコンポスト工場で処理されるようになった。

植木の伐採くずも収集車や市民自身の手によってこの工場に運ばれてくる。

分別が徹底していることは、この生ゴミの分析からもわかる。現在の生ゴミ中の異物（コンポスト化出来ないビニール、金属など）は、重量比でわずか数パーセントという。

決して簡単とはいえないゴミの分別に、なぜ市民が協力的なのか。

フライブルグ市の住民意識が高い理由は、行政が彼らにふたつの行動原理をあたえているからである。

ひとつは、パブリックな視点からの行動原理、もう一つは、インディビジュアルな視点からの行動原理である。

パブリックな視点からの行動原理とは何か。

それは、日常的な生活行動様式が地球環境に寄与しているという実感である。

ドイツで環境問題といって最初に出てくるのは、「気候変動」である。

都市交通問題への対応も、自然エネルギーの活用も、気候変動への対策として行われているといってよい。

特にフライブルグは「気候変動」のキーワードの下、政策のほとんどが決められている環境自治体である。

ゴミ問題も例外ではない。

フライブルグ市がここまで熱心にゴミの減量に取り組んでいるのも、ゴミの焼却処理を放棄したからなのである。

フライブルグ市がゴミの焼却処理を放棄した直接的な理由は、町のシンボルともいえる黒い森が、酸性雨の影響により、枯死しはじめたからである。一九九二年、これ以上の居住環境の悪化を防ぐために、すべてのゴミの焼却処理を廃止し、埋め立て処理への転換を図った。

そのために、最終処分場をできるだけ長期にわたって使用する必要があり、フライブルグ市はゴミを出さないシステムの構築に取り組んできた。

一方、日本である。

日独とも、最終処分場の延命の為、ゴミの減量に取り組む、という姿勢は同じである。

しかし、かたや地球環境を守るために焼却処分の放棄を決定したのに対し、かたや基数ベースで全世界の8割にのぼる焼却炉を保有する焼却大国である。どちらがよりグローバルな視座に立っているのか、どちらにより大義名分があるか、明らかであろう。

それでは、行政が市民に与えているインディビジュアルな視点からの行動原理とはな

んだろうか。

それは、ゴミを分別・減量することが個人個人に具体的なもの、お金になって還元されるということである。

フライブルグ市のゴミ料金は、残余ゴミ、埋め立てゴミの量で決定される。

ゴミをきちんと分別してリユースしたり、資源ゴミとして出す事によりリサイクルしたりするとその分ゴミ料金が安くなる仕組みになっている。

このゴミの量は、収集に使用されるバケツのサイズと、収集の回数で決められてくる。

各家庭では、少しでも小さいバケツで、少しでも少ない回数でゴミを出そうと、熱心にゴミを分別している。

残念ながら、日本の行政はこのふたつの視点をまだまだ住民に提供しきれていない。

それは、日本の国全体が、「ゴミは焼却」という政策にあるせいでもあるし、ゴミを企業や市民の自己責任にゆだねることに、心理的な抵抗感を持っているせいでもある。

しかし、フライブルグ市はこの政策によって、ゴミの大減量に成功し、CO_2やNO_2排出量削減により地球環境保護に寄与し、ゴミに関わる支出を全てゴミ収集料金のなかでまかなうことに成功した。

ドイツにはドイツのやりかたがあり、それをそのまま日本に輸入してくることには、当然無理があろう。

しかし、ドイツには日本が学び、そこから日本方式を発展させるべき、「思想」があることには間違いない。

行政改革のかけごえばかりが響く中、まずは市民の自助努力にまかせてみる。行政は、そのための環境づくりに徹する。自治体はそんな勇気を持ってもいいのではないだろうか。

缶の話し

アルミ・スチール缶はリサイクルの優等生

長沼商事㈱社長　長沼正夫

東多摩再資源化事業協同組合の皆様方には常日頃、鉄屑及び非鉄金属屑の集荷で大変お世話になりまして感謝申し上げます。

今般紺野理事長様よりあき缶の状況について寄稿する様にとのお話がありましたので浅学ではありますが、「アルミ缶リサイクル協会」及び、「あき缶処理対策協会」の統計資料を参考に私見を述べさせて戴きます。

あき缶はご存知の通りその材質によってアルミ缶とスチール缶に大別されます。

資源物として収集される際は概ね一緒に回収されますがこれはリサイクルセンター等で選別される時に電磁石で簡単に分別出来るので、収集の際には分離する必要はありませんが、ガラス屑やプラスチック等の不純物は極力避けて欲しいと思います。

製品として需要先へ納入する時に不純物の混入度によって品質評価が行われ粗悪品は返品されることもあります。

市民の皆様方は分別収集等に出す場合にはゴミを捨てるのではなく資源物を提供するという意識をもたれて、例えば内容物の付着したものは軽く水洗いしてから出すという様なご配慮を戴ければ大変有難いと思います。

アルミ缶とスチール缶はそれぞれ適正な大きさにプレスされて商品となりますが、その後の両者は価格は勿論として流通経路も需要先も全く異るルートを辿ることになります。その詳細については後述致しますが、両者に共通して言える事は需要先への経営規

模が大きく原料の消費量も大量なため常時受け入れてもらえることであります。

この点が古紙やカレット等の他の資源物と異なるところです。

一旦回収量が増えると忽ち納入先が無くなるというのでは折角のリサイクル意欲も冷えてしまいますがあき缶にはその様な事態は先ず起こらないと思います。

勿論市況商品ですから価格の変動は避けられず私共業者は時折痛い目に遭いますが、それでも需給が安定していることは有難いことであります

こうした需給の安定をうけてあき缶の再資源化率は年々上昇を続けており平成八年度には両者とも七〇％以上の高率を記録して非公式ながら世界第一位になったと推定されます。

この成果の要因としては前述した様に需給の安定した商品であることに加え市民の間に資源リサイクルの意識が浸透し、自治体の分別収集や集団回収に積極的に協力された結果が、集荷量の飛躍的な増加となったものと思われます

更に自治体が各地でリサイクルセンターを設置して各品目に応じた選別作業を行って品質の向上に努めたことも大きな要因と考えられます。

あき缶はリサイクルの優等生と自負しております。

次にアルミ缶とスチール缶の夫々について少し検討してみたいと思います。

アルミ缶の平成八年度の再資源化率は七〇・二％重量にして十九万四百トンになりました。

平成元年には四二・五％でしたから飛躍的な増加です。

アルミ缶の再利用される用途は品質によって分類され缶材・型材及び製鋼用脱酸剤等に使用されます。

高品質が要求される缶材には回収量の七一％が向けられています。

アルミ缶プレスの価格は地金の国際価格や精錬メーカーの稼働状況及び季節要因等によって大きく変動しその予測は非常に困難です。

しかし我が国は地金を始めアルミ原料はすべて外国に依存しているため国内で調達出来るアルミ缶プレスへの依存度は今後も益々高まると思います。

スチール缶の平成八年度の再資源化率は七七・三％重量では百十万トンとなり平成元年の四三・六％から大きく伸びております。

スチール缶スクラップは主として電炉メーカーの原料として使用されますが最近では高炉メーカーでも使用しています。

平成四年頃までは不純物の混入が多くシュレッダーにかけて選別加工しなければ使用出来ませんでしたが最近では品質が向上し一部の粗悪品を除いて缶プレスとして流通しています。

但し価格は電炉メーカーの減産等の影響をうけて低下しております。

以上とりとめの無いことを書き並べましたがご判読戴ければ幸いでございます。

今後とも資源リサイクルについて皆様方の一層のご活躍をご期待申し上げます。

リサイクル川柳

▼捨て放題　ごみも資源も
モラルまで

▼大切と気付いた頃には
資源尽き

▼ダイオキシン
焼くな埋めるな！なぜ使う
「ネジマワシ」

ビデオ製作を依頼して

二年前まで府中で古紙回収問屋を営んでいた小林さんが、地元のビデオ同好会で活躍なさっていると聞きまして、我が組合のPRビデオの作成をグループの皆様にお願い致しました

その初仕事の感想文をいただきました。

ありがとうございました。

撮らせていただく

十月四日の貴組合恒例のボーリング大会の撮影には多大な御協力を戴きまして本当に有難うございました。

思えば、つい先頃迄、皆様と同じ敷地に住み同じ釜のメシを食べていたのに、今は其の垣根の外から眺めるだけになってしまい何とも淋しい思いを致しましたが、以前と変わらぬ皆様の御温情にふれて、何時の間にか垣根の内に入り我を忘れて楽しい時を過ごしました。

明るくのびのびとゲームを楽しんでいる組合の皆様や従業員の方達を見ていると、組合員皆様の団結の強さなんだろうな思いました。

病を得た私が長い間、従事して来た商売を離れて、今は御存知の様な趣味に生き甲斐を見い出して頑張っております。

心筋梗塞という時限爆弾をかかえているので、かなり不安ではありますが、病気の事を気にしていては何も出来ませんので考えない事にしております。

どんな趣味でも同じだと思いますが、本気になってのめり込むと、それはそれで結構面白いものです。

撮影の勉強や、編集の勉強等、其の道のプロの方から教えを受けております。

今回のように動きが激しいものを撮ったのは、私は始めてで改めて撮る事の難しさを知りました。　映像の編集は料理を作るのに似ていると教わりましたが素材の種類が多い程、美味しい料理が作れる様に、ビデオの編集も撮影された沢山のカットが素材になるわけですから、よい作品に仕上げる為には撮影をシッカリやる必要があります。

又、撮影以上に大切なのが編集で、撮影に要した五倍位の時間が必要です。

四人で合計、八時間位撮ったテープを何回も何回も見ながら、シーン毎に選び出してつないでゆきます。

更に、作品全体の流れの中で違和感のあるショットはないか、流れから浮き上がったシーンはないか等チェックしながら編集作業を進めます。

この様にして出来た後、編集を改めて検討して、いよいよ本編集に入ります。

時には一つのシーンの取捨、又は、取換に小一時間も議論する事すらあります。

この様に種々の議論を重ね修正を繰り返しながら仕上げのテープを作ります。

いずれにしても私達は素人の集まりですので種々と制約があります。

例えば、挿入するB・G・M・にしても著作権の問題があり、活動範囲は限定されますが、しかし作る以上は種々のネックをクリアしてより質の高い作品を作れる様に勉強もして、努力もしております。

「撮らせて戴く」この姿勢を何時迄も忘れずに頑張って行きたいと思っています。

（KEY工房　小林秀雄）

各市のリサイクルフェアに参加

古紙の分別教室を開催

リサイクルフェスティバルが八月二日小平市福祉会館前広場、十月十二日に田無市役所前庭十九日に東村山市役所駐車場にて、晴天の秋空のもと盛大に開催されました。

当組合としても、組合員、従業員一丸となって協力し、市民のリサイクルに対する関心を少しでも高めてもらおうと参加いたしました。アルミ缶やスチール缶から製品になるまでの行程を実物を並べて説明したり、古紙の分別の仕方を、より理解してもらうためにリサイクル教室などを開きました。又、再生紙普及のために牛乳パックで作ったトイレットペーパーを配り市民にPR致しました。大変多くの市民の方たちに参加して頂きましたが、なかには牛乳パックの出し方を初めて知った若い奥さんや、紙なら全部ひとまとめにしていた奥さんなどもいて大変有意義なリサイクルフェスティバルでした。

（吉浦記）

古紙価格回復の兆し見えず！

1997年７～９月組合委託事業の資源取扱量(kg)

	古紙	古布	生きビン	鉄・非鉄
小　平	1,607,200	122,505	72,244	232,159
柳泉園	2,107,550	103,860		
東村山	589,830	55,100		
東久留米	165,620			71,670
東大和				74,689
合計	4,470,200	281,465	72,244	378,518

古紙の回収量は依然として高水準で当組合の取扱い量は昨年４月～９月の半年間で比較すると２千５百トン近く増えている。テレビなどマスコミで古紙問題が多く取り上げられてはいるが具体的な成果が上がるにはまだ時間がかかりそうである。

次々と集団回収支援

去る7月から柳泉園4市、東久留米市・田無市・保谷市・清瀬市が古紙3品（新聞・段ボール・雑誌）に4円からの業者支援を開始した事は先号のヴィーナス通信でお知らせしました。それに続き東村山市・東大和市も十月から、同じく古紙3品に4円の支援を開始、、又小平市は各回収団体に出していた雑誌の助成金を7円から11円に上げ、4円を団体から回収業者に逆有償支援するシステムを暫定的に開始しました。

（集団回収委員長　小畑）

小平市ペットボトル全市で資源回収

小平市は十月からペットボトルが一般回収になり、今まで以上に作業が大変になりました。我々のペットボトル工場の作業内容を簡単に説明します。業者が回収したペットボトルの袋をショベルローダーでピットにあけて、破袋機にかけ、振動フィーダーを通り、手選別コンベヤーに落ちます。ここでは八人の作業員が破けた袋、ビン、缶、可燃物、不燃物、ペットボトルのキャップを取り除く作業をしていますが、破袋機で破けたはずの黄色の袋が意外に丈夫でペットボトル等を取り出すのに苦労することがあります。

又キャップ取りは今のところ、すべて取り外すようにしています。

最後にペットボトルは二五〇kgの塊にプレスされ、番線で結束し、メーカーにわたり生まれ変わります。

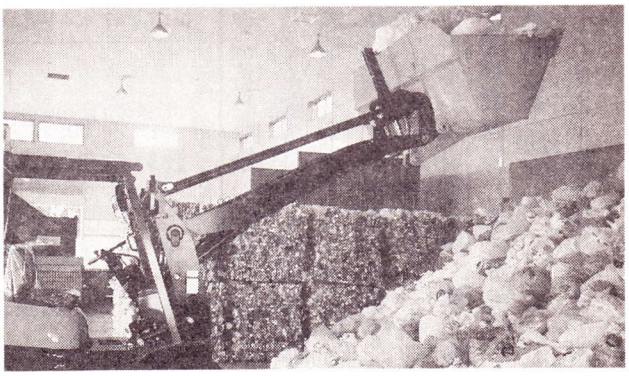
市民の皆様どうかペットボトルがリサイクルできますように水洗い、キャップ取りをお願いします。

追記

十月より小平市のペットボトル工場の本格稼働に備えて、当組合では人員の確保をはじめ、新たにフォークリフトとシャベルローダを投入した。

これによって、組合所有の車両は、フォークリフト3台、シャベルローダ1台、ダンプカー、パッカー車それぞれ1台、ライトバン1台となった。

「ペットボトル」の識別マーク



シンブンシ
紙聞新

新聞業界は我が国用紙生産量（1780万トン）の三割以上を消費している。

新聞用紙（365 万トン）・折込チラシ（130 万トン）ＯＡ紙・他（50万トン？）紙面では資源節約・発生抑制などと「きれいごと」を訴えていながら、自分の業界では、たれ流し放題だ。この様な新聞を「逆から読んでもシンブンシ」と言うのかな？　（若隠居）

私の履歴書　⑤

㈲藤本チェーン

代表取締役社長　藤本俊光

帰国して故郷兵庫へ！ふるさとには私の居場所もなく、居る気なく商都大阪へ出た。

大阪でも色々やってみたしロマンも多かったがさまざまな人生の裏表も体験した。

終戦四年後の引揚者は今浦島であり、無知なのか若かったのか、大失敗を度々やって夢も希望もなくした時、上京を兄から薦められたので、昭和三十二年春、東京は杉並区高円寺へ。

翌日からリヤカーを引いて『クズヤーオハライー』と大声で中野駅を中心に古新聞・雑誌・古衣類はもちろんビン・カン・金物・古道具類まで買い集めて歩いた。

幸いにも上京して住んだ一間のバラックは八十五坪の地所の中の片隅に建つた一軒屋。

くず屋業を修得し、大阪仕込みの商法で買い入れも始めた。

くず屋仲間がすぐ集まってきてくれ盛況に営業を続けた。

土地を買って家を建て、『ひばりが丘』に転居したのは、裸で上京してから六年目だった。時代の流れを先取りしその時から車で回収を始めた。間もなく東久留米団地の自治会長の発案でトイレットペーパーと古新聞の交換を開始した。

団地の皆さんの好評を得ることも出来、見事な集荷実績だった。

滝山団地が出来るとの情報を知った私は、常に新青梅街道周辺への移転を考えていたのでさっそく現在地を購入した。

天下の本州製紙から花輪も頂き華々しく開店し、本格的なチリ紙交換基地一号店が誕生した。派手好みでトッピな私は、ローズピンクのトラックを十台単位で特注し、新聞には『月給重役クラス』との見出しで運転手を募集した。

業界でも世間でも話題の藤本チェーンが出来上がった。

時代は日々刻々と移り、チリ紙交換から新聞販売店回収へ！そして子供会や自治会の集団回収へ、それは行政からの協力金で育てられ、今や主役は税金で全て賄う行政回収。

私たち回収業者はゴミ減らしの名の下で役所の指導を受け協力することで今は細々と営業を続けるだけという現状なのですが。

サテ、この様に生きて来た私はこれからどこへ行って何をするのでしょう。

（今回で藤本様の「私の履歴書」を終わらせて戴きます。長期にわたるご執筆ありがとうございました。）

夢見鳥

暑かった夏も過ぎ体を動かす仕事には丁度いい季節です。我々の仕事もそう言ってはなんですがフルに体を使う仕事です。重い新聞・雑誌の車への積み込み、荷台への乗り降り、ロープの掛け締めなど様々です。それに単純に積むだけでなく、各持ち込む問屋の都合、降ろす順序、効率を考えながら積み込みます。又、近頃は古紙の中に禁忌品（リサイクルできない紙）が増え、種類も多く、我々の目と手でより分けなければいけません。こういった苦労が最近はあまり報われませんが日頃の健康に感謝して今日も仕事頑張ってます。

（又三郎）

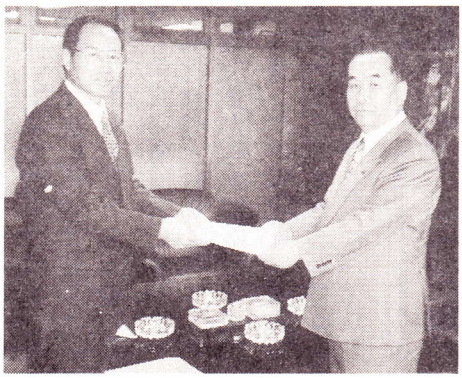
行事・行動

（八月）
二日　小平Rフェスチバル
四日：保谷市ごみ減量審
六日：集団回収委員会
一一日：定例理事会
一八日：委託事業委員会
二一日：小平市集団回収業者懇談会
二二日：東京とことん討論会
二六日：東大和市ごみ減量審
二七日：東村山市ごみ減量審
：保谷市ごみ減量審
二八日：古紙余剰問題研究会
三〇日：日資連リサイクル委

（九月）
一日：小平市ごみ減量審
三日：東久留米ごみ減量審
四日：中小企業団体中央会
：研修会で講演
五日：小平RC責任者会議
八日：東大和市業者懇談会
九日：古紙余剰問題研究会
財務委員会
一一日：定例理事会
一九日：東久留米ごみ減量審
二四日：古紙C業務委員会
二六日：保谷市ごみ減量審
：RC安全会議
三〇日：東久留米ごみ減量審
：広報委員会

（十月）
一日：福利厚生委員会
三日：小平市ごみ減量審
：東大和市ごみ減量審
四日：組合ボーリング大会
七日：東村山市業者懇談会
一一日：定例理事会
一二日：田無市Rフェステ
一三日：古紙余剰問題研究会
一四日：古紙循環プロジェク
一八日：日資連リサイクル委
一九日：東村山市Rフェステ
二〇日：広報委員会
二三日　多摩R団連幹事会
二四日：広報委員会
二五日：多摩とことん討論会
二六日　清瀬市市政懇談会
二八日　文京区区民セミナー
二九日：古紙C業務委員会
三〇日：古紙余剰問題研究会

【お知らせ】
10／06：テレビ東京23時WBSの特集「紙面楚歌」に理事長と栗原紙材（当組合員）が出演し、古紙利用促進をPR。
10／14：東村山市廃棄物減量審議会会長を務めていた理事長が、細渕市長から「アメニティー基金運用方法」に継いで諮問を受けた「透明半透明の指定袋」に関し審議会の意見をまとめ答申した。



答申書を市長（右）に渡す紺野（左）審議会長

編集後記

松下政経塾の栗田様　貴重な体験にもとずいた直言拝聴ありがとうございました。町中を疎水が流れる美しい都市地球環境に寄与する多摩地区といわれるようにリサイクル活動をもっと盛り上げて行きましょう。

新聞社が読者サービスとしておこなっていた販売店による新聞回収が、あちこちで中止する動きが出て来ました。紙面では、企業責任、生産者責任などと記事にしときながら、自分のことになると行政に頼るのは、どこかおかしくないですか。

これからますます寒くなって参ります、組合員、組合従業員、ヴィーナス通信愛読者の皆様カゼなどひかないように、お体を大切にして下さい

（吉浦）